

薬の可能性を医師・患者さんへ

「英語力」を 「希望を届ける力」に

昇華させたい

バイエル薬品株式会社
循環器領域事業部にて研修中
三田 直侑さん



寺子屋スタイルの授業風景。
生徒たちは自由な雰囲気の中で学ぶ楽しさを知り、「自ら学ぶ」意識を高めていく。

差が研究力の差になることを痛感しました。大量の英文を早く、正確に読む力が、実務でアドバンテージになると信じています。

「教えてもらう」のではなく

「自ら考え、学ぶ」力を修得

——平岡塾との出会いは?

三田 中学2年の終わり頃、母の薦めで体験入塾に参加しました。教室に座卓が並び、机の上には飲み物や軽食が置かれている。リラックスした雰囲気な

のに、1コマ3時間の長丁場の授業が、ハイスペースで進んでいく。「すごいところだな」が第印象でしたね。

平岡塾の特徴は、反復により基礎を徹底的に身につけること。宿題が多いこ

とで知られます。が、読み解き、文法、英作文などそれぞれ解くのに1~2時間かかる宿題が課され、次の時間はプリントの音読、答え合わせから始まります。そもそもただ正解を確認して終わりではなく、なぜ正しいのか、何が間違っているのか、間違いをどう訂正すればいいのかまで解説していく。1つの英文をいろいろな方向から見ることで、得られる情報が何倍にも増えるのです。「教えられる」のではなく「自分で考え学ぶ」力が養われたと思います。

——印象に残っている教材は?

三田 デカルトの『方法序説』やラッセルの『教育論』。日本語訳にとどまらず、作品の書かれた時代背景や思想などを含めての解説も面白かった。授業後に講師室に行き、英語はもちろん文化や思想に関する質問を先生方にぶつけたこともあります。今思うと、法学部に進学したきっかけの「つがっこにあつたのかもしれませんね。」

——平岡塾での学びが役立っていると感じられることがありますか。

三田 物事に対する姿勢や取り組み方ですね。当たり前のことを当たり前でできるようになるまで繰り返す。そうすることでしか基礎は身につかないし、応用はきかないことを教えられました。また、新たな人間関係を築いていく

将来につながる

高いコミュニケーション力を

——今後の抱負をお聞かせください。

三田 学生時代は、どちらかというと

たい。そして多くの医師や患者さんに希望を届けたい。そんな野望を持つています。

——最後に、中高生へのアドバイスをお願いします。

三田 語学の修得に近道はありません。私は大学時代、平岡塾で後輩の指導に携わったのですが、「英語の考え方で英文を読む」という指導を心がけました。一度日本語に訳すのではなく、頭の中へ英語の思考回路を作る:繰り返し英文を読み、問題を解くことで自身につきませんが、それができれば英語への苦手意識はなくなるはずです。世界もどんどん広がるでしょう。そして気がつけば一生使える英語が身についている。それは、将来においてあなたの大好きな強みになると思います。



平岡塾で使用している教材。
ラッセル、オーウェルなど、古典的名著の名文が中心だ。

本物の英語力が身につく塾として知られる平岡塾。今春製薬会社に入社、医療に関わる道を選んだ三田さんは、「平岡塾での学びが、今の自分の原点」と語る。単なる英語力の習得にとどまらない、「平岡英語」の魅力を聞いた。

社会にイノベーションを起こす
薬の可能性に惹かれて製薬会社へ

——現在の道を選ばれた経緯をお聞かせください。

三田 東京大学入学後、人々の生活・人生・生命など、社会を幅広く学べることを考え、法学部に進学。その後、薬学部に学士入学しました。製薬会社を選んだのは、研究室と社会を結び付ける仕事をと思ったから。新しい薬は治療に希望をもたらし、社会にイノベーションを引き起こす力を持つ、そんな薬の可能性に惹かれたのです。

バイエルはドイツで創立、解熱鎮痛薬として知られる「アスピリン」を開発した会社で、日本で操業して100年以上の歴史を持っています。現在は研修中で、先輩MR(医療情報担当者)に随行して病院や医療機関を訪問し、経験を積んでいるところです。

——法学と薬学、かなり異なる学問のように思えますが。

三田 「使う人あつての薬」ですし、薬を世に送り出すために、製薬会社は大きな役割を果たしていると思います。そこで重要なのが「今どんな薬が必要とされているのか」「医師や患者さんはどんな情報を求めているのか」「どんな情報を提供できるのか」を正確に把握することは、自分の強みになるはずですし、遠回りをしたという意識はないですね。

——仕事上で英語の必要性を実感することはありますか。

三田 まだ実務に就いているわけではありませんが、本社がドイツということもあり、ニユースレターやメール、社内資料などが英語で届くこともあります。最新の医療情報を求めて論文を読む際にも、英語を使わなければ、おそらく質の高い情報提供にはつながらないと思います。大学時代には、研究室で英語の論文を読んで実験を再現することがありました。手順や条件などを正確に汲み取らなければ見当違いな実験を行ってしまうなど、英語力の

■平岡塾 / TEL.03-3463-7535 http://hirakajuku.co.jp/